封神演義と紫微斗数

2010/10/03 椎羅作成

【はたして紫微斗数は封神演義に由来するのか？】

中国明代の伝奇小説である「封神演義」が、紫微斗数の源泉のひとつであるという説があります。例えば、講談社文庫版封神演義の前書きで訳者の安能務氏は「さらに言えば、中国の占星術「紫微斗数」も「封神演義」に由来している」（＊１）と述べています。

しかし、私は（若干の影響の可能性がなかったとは言い切れませんが）紫微斗数が封神演義に由来するという説には、賛同しがたいのです。

中国明代において、庶民階層の成長に伴い大衆文化が大きく発展しました。その中でも特筆すべきは、明代大衆文学で、小説では「水滸伝」「三国史演義」「西遊記」「金瓶梅」などが有名です。封神演義は、この明代小説のうちのひとつで、通説によると、著書は陸西星という道士で、万暦なかば（1600 年前後）の成立と考えられています（＊２）。陸西星は字を長庚、潜虚道人と号し、道教丹道派東派の開祖でもあります。

一方、我々が典拠としている「紫微斗数全書」（＊３）は嘉靖庚戌年（1550 年）の成立で（＊４）、この書を読めば（紫微斗数の成立を伝承どおりに唐末宋初の陳希夷にまで逆のぼるかどうかはともかくとして）、「全書」以前に紫微斗数という法術が成立していたことは明らかです。（当然のことながら、紫微斗数全書には封神演義のホの字も出てきません）。

したがって、封神演義が成立したのは、紫微斗数が成立するよりも後代であると推定されますので、紫微斗数が封神演義に由来するとは考えられないのです。

ただ、紫微斗数のみならず、子平八字などの中国命占が広く大衆に知られ、大衆の関心を集めたのは、明代に発展した大衆文化の中においてのことでした。したがって、明代小説のひとつである封神演義のイメージが、明代大衆文化の中で、占星術のイメージと渾然として考えられ、扱われた可能性は有り得ることだと思います。

まあ、歴史学的な講釈はさておき、少なくとも紫微斗数の主要な星曜のイメージをつかむために、封神演義という物語を利用すれば便利なところはあります。ここではあまり杓子定規にならず、使えるものは何でも使えの精神で、封神演義のキャラクターイメージを参考にしながら、紫微斗数主星のイメージづくりを行っていくことにいたしましょう。

＊１　封神演義（上）　安能務訳　講談社　1988　pp.20-21

＊２　異説あり。例えば許仲琳作説、許仲琳・李雲翔合作説など

＊３　いわゆる「南派紫微斗数」の典拠とされる。「北派紫微斗数」の典拠としては「十八飛星索天紫微斗数」「太乙金井陰陽論」「術天機」などがある

＊４　集文書局版「紫微斗数全書」前文による

【封神演義キャラクターと紫微斗数諸星との対応】

私が最初に封神演義のキャラクターと紫微斗数星曜との対応を見たのは、透派の「五術占い全書」においてでした。この書の中では「封神演義」という書名は明記してありませんが、対応されている人物を見れば、封神演義を拠り所にしていることは明白です。

その後、わが国において紹介される所謂「紫微斗数伝説」は、ほとんどがこの対応に拠っています。

しかし私が調べた限りでは、台湾で発行されている紫微斗数の研究書には、封神演義について言及しているものは発見できませんでした。私の想像ですが、封神演義のキャラクターと紫微斗数の星曜との対応は、透派における教育的ファンタジーであり、また紫微斗数という占術を日本ではじめて紹介するにあたり、西洋占星術とギリシア・ローマ神話の神々との対応のような伝説的イメージがあった方がわかりよいので、考えられたものなのでしょう。

以下、五術占い全書に従って、紫微斗数諸星曜と封神演技キャラクターの対応を掲げます（＊５）。

紫微星　伯邑　（文王の長男）
「尊貴・気品」をつかさどります。

天機星　姜尚　（別名を太公望、文王の軍師）
「知恵・精神」をつかさどります。

太陽星　比干　（紂王の忠臣）
「光明・博愛」をつかさどります。

武曲星　武王　（文王の次男、伯邑の弟で周王朝を築く）
「武勇・財富」をつかさどります。

天同星　文王　（伯邑と武王の父親、周の部落の長）
「融和・温順」をつかさどります。

廉貞星　費仲　（紂王の奸臣）
「歪曲・邪悪」をつかさどります。

天府星　姜皇后（紂王の后）
「才能・慈悲」をつかさどります。

太陰星　賈夫人（紂王の忠臣の黄飛虎の妻）
「潔白・住宅」をつかさどります。

貪狼星　妲己（紂王の妾、九天玄女の部下で狸の妖精が
諸候の娘の体に入り込んで女となった）
「欲望・物質」をつかさどります。

巨門星　馬千金（文王の軍師姜尚の妻）
「疑惑・是非」をつかさどります。

天相星　聞太師（紂王の忠臣）
「慈愛・奉仕」をつかさどります。

天梁星　李天王（武王の忠臣）
「恒常・統率」をつかさどります。

七殺星　黄飛虎（紂王の忠臣、のちに武王に従う）
「威厳・激烈」をつかさどります。

炎星（火星）殷郊（紂王の子）
「乱暴・火の燃え移るはやさ」をつかさどります。

鈴星　殷洪（紂王の子）
「乱暴・大きな音による驚き」をつかさどります。

破軍星　紂王（殷王朝の暴君）
「破損・消耗」をつかさどります。

文曲星　竜吉（姜尚を助けた女将）
「上品・しとやか・粉飾」をつかさどります。

文昌星　嬋玉（武王を助けた女将）
「上品・しとやか・粉飾」をつかさどります。

羊刃星（擎羊星）楊戩（周軍の大武将）
「残忍・粗暴」をつかさどります。

陀羅星　天化（賈夫人の息子）
「勇敢・残忍」をつかさどります。

＊５　「中国正統五術占い全書」　張　耀文・佐藤六龍　著
文研出版　1975　　pp.67～68
ただし「炎星（火星）」、「羊刃星（擎羊星）」の括弧内については椎羅による。

【封神演義の背景】

封神演義のストーリーについては、直接この小説に当たっていただくのが一番なのですが、簡単に物語の背景と、かいつまんだあらすじを紹介させていただきます。

物語は中国古代、殷王朝が滅亡し周王朝に取って変わられる間の出来事に題材を取っています。中国古代の史書によれば、殷（商）王朝は湯王が夏王朝を滅ぼし打ち立てた王国で、31 代の紂王の時に周の武王（姫発）によって滅ぼされたということになっています。

中国の古代王朝については、史書によれば夏王朝以前は五帝が統治し、その前は伏羲、神農、女媧の三皇の時代があったことになっています。現在のところ、遺跡等の物証により歴史学的に確認できるのは殷王朝までで、それ以前については伝説の域を出ていません。

殷の文化は紀元前 1500 年頃から紀元前 12 世紀ころまで続いたと推定されていますので、舞台は今から約 3000 年ほど前の中国ということになります。

【封神演義の世界観】

封神演義は作者の陸西星の独特の世界観で彩られています。

この世界は、仙人の住む仙界と、天（神様）の住む天界と、人間の住む人間界の３つの世界で構成されています。その中でも仙界は、大きく、崑崙山を中心とする闡教と、蓬來島を中心とする截教の２つの系統に別れています。

このうち闡教の仙人は、もともと人間であったものが長い修業の結果仙人となったもので、崑崙山を本山とするところから山岳派と呼ばれています。一方截教の仙人は、もともと禽獣や樹木や木石が、長い年月を経て自然の霊気を浴びて仙人となったもので、蓬來島を本山とするところから、海島派と呼ばれています。実はこの２派は対立関係にあります。

さて、ここで闡教を中心に仙界大再編計画が持ち上がります。人間界の中には、人間のくせに人間離れした仙人もどきのような人間がいます。さりとて仙骨がないため（仙人となるためには、仙骨というものが必要なのだそうです）仙人になりきるわけにもいきません。彼らをこのままにしておくのは、仙界にとっても人間界にとっても好ましくないと考えた闡教の仙人達は、神界というものを新たに作って、それらの人間離れした人間を神に封じてそこに住まわせようと考えました。封神演義のタイトルは、ここに由来します。

しかし、人間を神として封じるためには一度死んでもらわなければならない。そこで、このたびの殷（商）王朝から周王朝へと変わる易姓革命のドサクサを利用しようとするのです。

【物語のストーリー】

殷（商）王朝最後の皇帝である紂王は、ある時女媧の神殿（女媧宮）に参拝します。その時女媧の女神像を見て、紂王はすっかり心を奪われてしまいます。心を奪われると

言えば聞こえがいいですが、要するに紂王は、とても素直に健康な男性であったようで、早い話が「ええねーちゃんやなあ。何とかワシの妾にしてえっちしたいなぁ」と思ったわけです。で、その思いのたけを神殿の壁に落書きして帰ります。

たまたまその時、女媧は天界に所用で赴いており不在でした。女媧は神殿に戻り、紂王の落書きを見て激怒します。人間の分際で天（女神）であるわらわを妾にしようなぞとは、何たること。

昔も今も、人間も神サマも、女性を怒らせてただですむ訳がありません。ここに紂王と殷王朝の悲劇が始まったのです。

女媧は自分の配下の千年の女狐の妖精を呼び付け、紂王をこらしめるように命じます。この女狐の妖精は、殷王朝の諸侯の一人である蘇護の娘で、絶世の美女と誉れ高い妲己を殺し、妲己に成り代わります。妲己は紂王の妻妾の一人として宮中に入り込み、その美貌と妖術で紂王を虜にし、乱心させます。

妲己に取りつかれ操られた紂王は、以後人が変わったかのような暴君となり、忠臣を無実の罪で処刑するは、庶民に重税を掛け重労働を強いるは、無茶苦茶なことをやります。あげくの果てに、殷王朝に従う四大諸侯を呼び出し、あるいは処刑し、あるいは幽閉してしまいます。

この四大諸侯のうちのひとつ、西伯侯姫昌（文王）は艱難辛苦の末、自城に戻り、殷王朝討伐の烽火を上げます。ここで、姫昌を中心とするアンチ殷王朝連合軍の軍師に迎えられるのが、太公望こと姜尚（姜子牙）です。

その、アンチ殷王朝連合軍 VS 殷王朝軍の戦いがこの物語の見せ場なのですが、（仙人妖怪入り乱れ、仙術、秘密兵器、人造人間、ロボットなんでもありの超アクション・バトル・ファンタジーです(^^）結局、史実のとおり、姫昌（その遺志を継いだ次男の姫発（武王）軍により、殷王朝は討ち滅ぼされてしまいます。

仙界の思惑どおり、所定の人間を神と報じ天界に向かえ入れ、封神演義はその幕を閉じます。

【主星キャラクター】

それでは、順を追って「五術占い全書」の記述に従い、紫微斗数の主要な星曜に対応する封神演義のキャラクターについて、簡単に紹介することにいたしましょう。

ただ、あくまでこれは諸星曜のイメージづくりの、ひとつの素材にしか過ぎません。そこで、さらに参考までに、私がテキスト「紫微斗数入門」で記述した私の個人的なイメージも、その後に併記させていただきました。

これらを参考に、皆さん個々人のイメージを形成していただきたいと思います。そのためには、実際に命盤を算出してみて、これらのイメージを参考にその人となりを照らし合わせ、命盤にもとづくイメージづくりを数多く行うことが有益だと思います。

【紫微星】

●封神演義のキャラクター

商（殷）王朝の四大諸侯のひとつ、西岐（後の周王国）を治める姫昌（周の文王）の長男、伯邑が紫微星に当てられています。

伯邑は、品性高く美男子で、また琴の名手でもありました。父王である姫昌が紂王によって幽閉された時、７年待てという父王の言いつけを待ち切れず、また臣下の者が止めるのも無視して、朝歌（商の首都）に父王釈放の嘆願に向かいます。見かけによらず直情的で、また世間知らずなところがあったようです。

朝歌で優雅でハンサムな伯邑をひと目見た妲己は、よこしまな気持ちを起こし、何とか彼を自分のものにしたいと思います。琴の手ほどきを受けるという口実をつけて伯邑と二人きりになった妲己は、伯邑を誘惑します。ところが、清廉で気高い心を持った伯邑は、その誘いを拒絶しました。

自分の魅力を持ってしても落ちない伯邑に、妲己はいたくプライドを傷つけられ、逆に伯邑が私を誘惑したと、ありもしないことを紂王に言いつけます。

哀れ伯邑は無実の罪で処刑されてしまいます。

●私のイメージ

紫微星についての私の個人的なイメージも、封神演義のそれと大きくは違いません。まあ、言って見れば良家のおぼっちゃま、お嬢さま、といったイメージでしょうか(^^

以下、テキストより転載いたします。

紫微星は北斗、南斗、中天を司る帝星で、一説には北極星のことであるとも言われ、帝星として威厳、富貴、品格を象徴します。しかしながら、厳格で力強い父性のシンボルとしての帝王というよりは、むしろ皇太子（プリンス・プリンセス）のイメージで捉えた方がよいと思います。

彼は良家の貴公子です。気品に満ち、生まれながらに徳と福と富を備えています。心やさしく寛大で、臣民も彼を愛し、彼のことを悪く言う者はいません。彼は生まれた時から次代の皇帝となるべく周囲の期待を受け、帝王学を学びます。政治、経済、科学、心理学、宗教学とあらゆる知識を幅広く身につけています。ただし、一つの分野のスペシャリストではありません。人から慕われ、また将来のリーダーになるための特質を備えています。

彼の父もまた力で人々を屈服させ君臨した王ではなく、徳と知恵により国を治め、ひろく善政をしき人々の敬愛を受けたのでした。父王は古代から伝わる秘密の知恵を身につけていたのですが、彼にその知恵の伝授を終えぬうちに亡くなってしまいました。

彼は皇室の奥で育てられたため、多少世間知らずなところがあります。まだ王としての経験は積んでいませんが、王としての可能性を秘めた存在なのです。

【天機星】

●封神演義のキャラクター

周（西岐）連合軍の軍師として大活躍するのが、太公望こと姜尚（姜子牙）です。天機星はこの姜尚に当てられています。

周の軍師である姜尚については、中国古代の史書にも登場します。日本では一般に姜尚という名前よりは、太公望という呼び名で知られています。「覆水盆に返らず」の諺は有名ですよね(^^

また、彼は六韜という兵法書を著したとされています。

ところが封神演義では、姜子牙は崑崙山で修業を積んだ道士であり、大軍師というよりは（たしかに連合軍の総司令官的な役割を演ずるのですが）、むしろ各種仙術や秘密兵器を駆使して戦うプレーヤーズ・キャラクターとして描かれています。

彼は 32 才の時から 40 年間崑崙山の玉虚宮で仙術の修業を積みます。ところが、このたびの仙界大再編計画の司祭として白穂の矢を立てられ、仙界の密命を帯び人間界に戻されます。仙界大再編計画は、このたびの地上の商周易姓革命に乗じて、人間離れした人間を神に封じてしまおうというものです。彼は仙界からその封神を司る司祭としての役目を仰せ付かるのです。

結局、かれは周の軍師に迎えられ、周軍を勝利に導きます。

●私のイメージ

天機星についての私の個人的なイメージは、古代の大学者、道士といった老賢者的なものがあります。とはいえ、老賢者の中でも「術」よりは、やや「知」に偏重したイメージでしょうか。

学者、哲学者、道士、占星術師といったイメージです。

人物で言えば、老子、陳希夷、呂洞賓、アリストテレス、プラトン、プトレマイオスといったところでしょうか。現代ですと、科学者もそのイメージの範疇に入れてよいと思います。

以下、テキストの記述を転載します。

天機星は、その名が示すように天の機密、すなわちこの世の森羅万象をつかさどる神秘的な知恵を表します。天機星のイメージは、その知恵を身につけようとする求道者、知恵者、学者です。

彼は中国古代の賢人でした。彼は万巻の書を読破し、あらゆる学問に通じた大哲学者です。彼の興味はまず真理の探求に向けられます。神秘的な仙道の技法に通じ、錬金術、錬丹術に通じています。さらに医学、易にも造詣が深く、多くの占術を編み出します。

ひとたび彼の興味が外に向かい君主に用いられますと、その該博な知識を縦横に駆使し巧みな戦術をねる大軍師となります。こと戦争に限らず、内政、外政の政策一切を立案する非常に優秀な戦略スタッフであり、君主の参謀となります。

【太陽星】

●封神演義のキャラクター

商（殷）王朝の亜相（副宰相）比干が太陽星に当てられています。

比干は、先帝（すなわち紂王の父王）帝乙の弟で、紂王にとっては叔父に当る人です。紂王が王位を継ぐ際に、ただひとり意義を唱えた人でもありました。人格は高潔にして潔癖、正義の人です。

妲己にいいように操られ、錯乱し暴虐の限りをつくす紂王に心を痛めながら、最後まで何とか殷王朝を救おうと努力しました。

あるとき比干は、ワルノリをエスカレートさせる妲己に一泡吹かせてやろうと思う姜子牙と語らって一計を案じ、妲己の一族の妖狐を一網打尽にやっつけてしまいます。そのことを知った妲己は比干に怒り、復讐を思い立ちます。

結局、比干は妲己の計略にはまり、商王朝と紂王の行く末を案じつつも、自ら心臓をえぐり取り、果てるのでした。

●私のイメージ

太陽星についての私の個人的なイメージも、封神演義とほぼ同様、正義感にあふれた名宰相といったものです。以下、テキストの記述を転載します。

太陽星は、その名のとおり天空に輝く日輪、さんさんと陽光を降り注ぐ太陽のことです。一般的に感じられる「太陽」のイメージと同様、明るさ、陽気、元気、発展、正義などを意味します。

人に例えると、「皇帝」の紫微星に対して、その元で実際の一切の国政の責任を負う「宰相」と言うところでしょうか。

彼は強い信念と正義感にささえられた人で、もしも皇帝が道にはずれたことを行った場合、たとえ皇帝であっても遠慮なく諫言を呈しました。また彼は身体も頑強な人で、古代社会の宰相の常として武術にも優れていました。彼は決断力があり、国の左右を分かつような重要な戦いにおける戦略も的確な判断のもとに即断を下しました。

彼は司法長官も兼ねていました。彼が示した規範・規則・指針はすなわちすべての国民の行動の規範・規則となったのです。

西洋における太陽のイメージと同様に太陽星は「父性」のシンボルです。特に男性にとっては父親を表し、女性にとっては夫を表します。

【武曲星】

●封神演義のキャラクター

武曲星は、西岐（後の周）王姫昌（文王）の次男、姫発（後の武王）に当てられています。

前に述べたように、姫昌（文王）の長男伯邑は、商の妲己の計略にかかり死んでしまいます。従って、文王を継いで西岐軍のトップとなるのが次男の姫発です。彼は姜子牙という軍師の助けを得、また崑崙山の様々な仙人の助けを受け、遂に商（殷）王朝を打ち倒します。

父王文王の遺志を継ぎ、新たに周王朝を起こし、武王を名乗ります。

●私のイメージ

武曲星についての私の個人的なイメージは、その名が示すとおり、武人のイメージです。また、紫微斗数全書に金星とあるのを受け、財星としてのイメージもあります。以下にテキストの記述を転載します。

武曲星は、武人の星です。勇猛、果敢、剛毅、決断を表します。

人に例えると、全軍を率いる大将軍、司令官です。古代中国、彼の属する国は当時覇権を握っていた中央集権国家の周辺諸候でした。とはいえ、その連合国家群の周辺諸候の中では１、２を争う規模の国でした。

時が流れ、中央で覇権を握っていた王朝の政治は腐敗し、周辺大名の間で反

乱の気運が高まってきました。その周辺諸候の中心となったのが、彼の国の王で、彼は反乱軍の総司令官となったのです。戦いの火蓋は切って落とされました。長く苦しい戦いが続きました。しかし、結果的に諸候同盟は中央王朝を打ち倒すことに成功し、彼の国が、あらたに中央で覇権を握ることになったのです。

この勝利の功績は、すべて大将軍で連合軍総司令官の彼に帰するものであり、彼は大きな財産を築きました。また、その功績により国庫の番人（今で言えば大蔵大臣）を任じられたのでした。

【天同星】

●封神演義のキャラクター

天同星は、西岐（後の周）城主姫昌（文王）に当てられています。

易の成立の伝説によれば、最初、古代の王伏羲が八卦を画し、文王がこれを演（の）べて六十四卦となし、文王と周公が卦爻の辞、すなわち彖辞と爻辞とをつくり、孔子が十翼をつくったとされています。

したがって、伝説に従うと、周の文王は、易を現在我々が親しむような六十四卦のかたちにし、さらに息子の周公とともに 386 条の爻辞をつくったことになります。

これは、あくまでも伝説の域を出ない話ですが、封神演義では、この伝説にのっとり、姫昌（文王）は易の達人であるということになっています。

姫昌（文王）は西岐の城主で、商（殷）王朝の数ある諸侯のうちでも有力な豪族であり、商王朝四大諸侯のひとつに列せられていました。

姫昌は人徳高潔で、仁義にのっとった政治を行う徳の人で、また易の妙理に通ずる学者でもありました。

紂王が妲己を朝廷に迎えた後、妲己の妖術にかかり乱心した紂王は、妲己の四大諸侯の勢力削ぐべしというささやきに乗り、四大諸侯を朝歌（商の首都）に呼び出し、ある者は処刑し、ある者は幽閉してしまいます。

姫昌は運よく命は助かりますが、７年間の幽閉という憂患に会います。実は、姫昌は紂王の呼び出しの命を受けた際、易数を演べ、７年間の憂患を予知して朝歌に向かったのです。

７年の憂患から開放された姫昌は、故国西岐城に戻り、軍師を探し求めます。釣針に餌もつけずに釣りをしていた姜子牙（太公望）に出会い（このあたりの故事は有名ですよね(^^）、西岐の軍師に迎えます。

その後、商王朝打倒の軍を揚げますが、戦のなかばで姫昌は病に倒れ、不帰の客となってしまいます。その時、その後のすべてを次男の姫発と軍師姜子牙に託すのです。

●私のイメージ

天同星についての私の個人的なイメージは、礼儀正しく温厚な文人のイメージです。以下にテキストの記述を転載します。

天同星は、平安、慈悲、協調を表します。前の武曲星が武人の星であったのに対し、天同星は文人の星と言うことができます。広範な知識を身に付け、文筆にも優れたものがあります。人に例えると、中国古代の高級官僚や、あるいは閣僚に例えられるでしょう。閣僚でも陸軍大臣とか大蔵大臣といった権力を象徴するものではなく、文章や外交を司る文部大臣や外務大臣といった役どころでしょう。

彼は文墨に明るく、古今の書物を渉猟し、故事来歴についての詳しい知識を持っています。また、中国古代の「礼」や「楽（儀礼音楽）」にも通じ、さらに中国古代の哲学であり卜占の術でもある易にも通じています。

彼は、穏やかで平和を愛する優しい人で、はじめて彼に会う人でもすぐに打ち解けて話すことができました。それは身近な人々とだけのことではなく、近隣諸候との外交においても、彼の優れた外交手腕が効を奏したのです。

【廉貞星】

●封神演義のキャラクター

廉貞星は、紂王の奸臣、費仲に当てられています。

費仲は諫大夫という役職にありました。諫大夫とは、王の側近に侍って、王の言動に非があれば、すかさず諫言するのが、その勤めです。しかし費仲は、ひたすら紂王のご機嫌を取るだけで、諫言したことは一度もありません。彼にとっては、商王朝の行く末や紂王の言動の是非などどうでもよく、自己の保身と利益が全てに優先するのでした。

したがって、紂王に取り入るだけではなく、諸侯の朝賀の際には諸侯に賄賂を要求し、賄賂を無視する諸侯には不利益をはたらくという、とんでもない佞臣でした。

そのため太子聞仲や商容、比干や黄飛虎といった商（殷）王朝の忠臣たちからは睨まれ、疎んじられていました。

その費仲も、商王朝滅亡の気運の中で、いつまでもひとり権勢を誇るわけにはいきません。最後は岐山で氷づけに遭って凍死します。

●私のイメージ

廉貞星については、私は口先三寸の佞臣というよりも、もう少し気骨のあるところを感じましたので、山賊の親分といったイメージでまとめてみました。

廉貞星は、是非、善悪、邪悪を表します。人に例えると、野盗・山賊の親分。彼は古代中国において諸侯に召し抱えられるを潔しとせず、自ら邑を捨て野山に篭り、自給自足の生活を送ります。野盗・山賊とはいえ、娑婆世界の一切の束縛を逃れて生きようとする自由人なのです。時あたかも、諸侯大名の連合軍が中央集権王朝に反旗を翻し、中国大陸は戦乱の渦中にありました。

彼のもとには同じく自由に憧れ、また既成社会から落ちこぼれた者たちが集まり、野盗集団を結成していました。野盗とはいえ、首領の彼のもとで統率されたこの集団は、ちょっとした軍隊の精鋭部隊並の実力を持っていました。

彼らは決して農民などの庶民から略奪しようとはしませんでしたが、諸侯大名の部隊や商隊がなわばりを通りかかると、果敢に攻め入り略奪します。諸侯大名の間でも、大いに恐れられた存在でした。

【天府星】

●封神演義のキャラクター

天府星は、紂王の皇后、姜夫人に当てられています。

姜夫人は、商（殷）王朝の当主紂王の正室である皇后でした。その出自は、商王朝四大諸侯のひとつ東伯侯姜楚桓の娘です。

姜夫人は、妲己が宮中に入ってから次第に自堕落になっていく紂王の様子に眉をひそめ、紂王にも諫言し、また朝賀の席で妲己に強く説教をします。もとより妲己は、ゆくゆくは自分こそが正妻の座につくことを目論んでいますし、また衆目の前で説教されたことを憾みに思い、姜皇后を無きものにしようと思います。佞臣の費仲に命じ、

一計を案じ、姜皇后に濡れ衣を着せます。あわれ姜皇后は、拷問にかけられた末、一命を失います。

●私のイメージ

天府星については、私のイメージも封神演義のイメージと大きくは違いません。以下、テキストから転載します。

天府星は、紫微星と並ぶもうひとつの帝星です。紫微星は北斗、中天、南斗すべてを率いるのに対して、天府星は南斗第一星として南斗の星々を統括します。

これを人に例えると（紫微星の場合は皇太子に例えられましたが）、天府星の場合は皇帝の第一夫人である皇后に例えることができます。

彼女は皇后として宮廷に坐し、人々からも尊敬を受けていました。生まれながら聰明で美しく気高い女性でした。皇帝の寵愛を一身に受け幸せな毎日をおくっています。彼女は寛大で広い心を持ち、また慈悲深く、思慮深い女性でした。決して細かい事をいちいち気にすることなく、平穏な毎日を過ごしています。

また、彼女の実家は周辺諸候の中でも大きな勢力をほこり、非常に豊かな国でした。彼女が皇后となることにより、彼女の故郷の富がこの国にもたらされ、国庫を潤しました。

したがって、天府星はまた財星としての意味を持つようになります。

【太陰星】

●封神演義のキャラクター

太陰星は、商（殷）王朝の重臣である黄飛虎将軍の妻、賈夫人に当てられています。

賈夫人は、商（殷）王朝の大将軍、鎮国武成王黄飛虎将軍の夫人でした。彼女は商王朝随一の美人の誉れが高かったのですが、めったに公式の場には顔を見せない、極めて貞淑な夫人でした。

太陽星（比干）の稿でも述べましたが、あるとき、姜子牙は比干とはかり、妲己の一族郎党である妖狐を一網打尽に討ち滅ぼすのですが、その際に妖狐のアジトに火をかけたのが黄飛虎でした。妲己はこれを憾みに思い、復讐のチャンスをねらいます。

新年の朝賀の席に現われた賈夫人を、妲己はうまく言いくるめて摘星楼という物見台（宴会場）に連れ込みます。そこで、紂王と賈夫人を二人きりにしてしまいます。

もとより賈夫人は極めて貞淑潔癖の夫人でしたから、夫の主君とただ二人でいるということを恥じ、ひたすら平伏します。それを、まあまあ、と取り成そうとした紂王の手が賈夫人の肩に触れるや、賈夫人は不貞を恥じ、楼から身を投げて死んでしまいます。賈夫人は、まんまと妲己の罠にはまったのです。

●私のイメージ

太陰星については、私のイメージは「月」のイメージです。以下、テキストから転載します。

太陰星とは、夜空に輝く「月」のことです。紫微斗数では太陽星に対して太陰星という呼び方をします。自ら光を発することはありませんが、太陽の光を反射し夜空を照らします。太古から月は夜の世界の象徴として様々なイメージを与えられてきました。男性的で活動力を表す太陽に対し、月は女性的で神秘的な事柄や静寂と清らかさを表します。

人に例えると、穏やかで清らかで貞淑な貴婦人に例えられます。彼女はある国の宰相夫人でした。彼女は透き通るような肌をしていて神秘的な雰囲気を漂わせた、たいそうな美人でした。しかし彼女はめったに一人で家の外に出るようなことはなく、外出する時は常に夫につき従っていました。また決して夫以外の男性とは交わりませんでした。

彼女は、音楽や詩歌の才能があり、美しい歌をつくりました。また霊感にも恵まれ、その能力により夫の行動について適切な助言を行いました。

彼女は非常に心やさしい人で、戦乱で孤児となった子供達を自分の家に住まわせ、よく面倒をみました。後に彼女は実家から大きな不動産を受け継ぎ、その財産で孤児のための施設を設けたのです。

太陰星は男性にとっては妻を、女性にとっては母を表します。

【貪狼星】

●封神演義のキャラクター

貪狼星は、千年の牝狐の妖精、妲己に当てられています。

妲己は、もともとは商（殷）王朝の諸侯のひとつであるハ州侯蘇護の娘で、諸国随一の美人の誉高い美少女でした。その美人としての名声は風に乗り、王都朝歌にまで届きます。その結果、妲己は朝歌の紂王に召し抱えられることになりました。

これに目をつけたのが、紂王のはたらいた無礼に怒る女神女媧で、配下の千年の牝狐の妖精を遣わします。牝狐は朝歌へ向かう妲己一行のもとに忍び込み、妲己をまんまと殺したあと、妖術により妲己に化けて、朝廷に入り込みます。

その後は、女媧のいいつけを実行するべく、自分の美貌と妖術で紂王を誑かせ、自分のなすがままにあやつります。もとより千年の牝狐は好色きわまりない妖精でした。ですから、喜々としてこの任務に従ったのです。

幾度となく崑崙山の仙人や姜子牙がこの妲己（に化けた牝狐）を討ち取ろうとしますが、妲己は巧みにその攻撃をかわし続けます。しかし、とうとう商王朝が西岐軍（後の周王朝）に滅ぼされるに及んで、妲己もその命運尽き、捕えられ首を刎ねられてしまいます。

●私のイメージ

封神演義の妲己といえば、商王朝を滅亡に追いやった張本人として、悪玉のイメージが強いのですが、私は貪狼星そのものには、それほど悪（というか善悪）のイメージを感じません。むしろ、情け（深情け）、色気、性愛を強調して、次のようにまとめてみました。

貪狼星は、恋愛、欲望、交際、SEX を象徴します。

この星を人に例えると、グラマーで妖艶で悪魔的な魅力をもった夜の貴婦人というところでしょうか。古代社会の遊女に例えることができるでしょう。

遊女は、現代社会の枠組みの中では、ややもするとアンダーグラウンドな職業とされています。しかしながら古代社会（洋の東西を問わず、古代オリエントや古代インドや、あるいは我が国の江戸時代の吉原など）においては、当代を代表する知識階級でした。深い教養を身に付け、芸術にも造詣が深く、時には当時の知識階級であった客と哲学論議を交じ合わせることもありました。遊女というものは、その時代のその国の「文化」を体現した存在でした。古代（あるいは中世）の遊廓は、ただお酒を飲んで女を抱いて、といったシンプルなものではなく、当時の社会における「高級文化サロン」でもあったのです。

貪狼星である彼女も、古代社会の遊女の例に漏れず、深い教養と芸を身に付けていました。また、お酒を酌み交わしながら知的でウィットに富んだ会話をするのを好みました。とはいうものの、無味乾燥な議論ではなく、いわゆる「大人の会話」を楽しみ、勿論「大人の行為」も存分に楽しんだのです。

【巨門星】

●封神演義のキャラクター

巨門星は、姜子牙（太公望）の妻、馬千金に当てられています。

姜子牙は長く崑崙山の玉虚宮で道士として仙道の修業に明け暮れていました。ところがある日、洞主の元始天尊に呼び出され、封神の司祭としての密命を受け、下界に赴くことになります。

下山した姜子牙は、とりあえず旧知の宋異人の家に身を寄せます。この宋異人という人物は、なかなかにおせっかいの世話焼きで、早々に近隣の村で姜子牙の嫁さんを見つけて来てしまいます。

姜子牙もこれにはびっくりしましたが、宋異人の顔を立てるため、やむなく渋々ながら祝儀をあげます。ところが、この嫁さんである馬千金という女は、賢いというか気がいというか、自立心旺盛な猛烈婆さんでした。本格的に商周革命が動きだすまでぶらぶらしていようという姜子牙の尻をたたき、何とか商売で一儲けしようとします。もとより姜子牙に商才などなく、またその気もありませんので、商売なぞうまく行くはずがありません。そのたびに馬千金は姜子牙を責め、口論になり、姜子牙もほとほと嫌気がさします。

そうこうするうちに、姜子牙は商王朝の首都朝歌に下大夫として潜り込みます。彼は、どうにかして妲己の正体を暴き成敗しようとするのですが、悪賢い妲己はうまくその攻撃をかわし続けます。姜子牙は、妲己をここで成敗することは無理と悟り、天数に従い西岐に赴き姫氏を助勢することにします。

その時、馬千金は、下大夫という官職を捨て西岐に落ち延びようとする夫を罵り、ほとほと愛想が尽きたと離縁を迫ります。姜子牙はその申し出を受け馬千金と離縁し、ひとり西岐に赴くのです。

●私のイメージ

封神演義のイメージでは巨門星はおしゃべりなごうつくババアのイメージですが、私はもう少し建設的なニュアンスを取り入れてもいいと思います。以下、テキストから転載します。

巨門星は、弁舌、口舌、是非、を象徴します。

この星を人に例えると、遊説をする弁論家のイメージが浮かびあがります。現代のようにメディアの発達を見なかった古代社会において、自己の考えを述べるには、弁論によるのが常でした。古代社会以降近代まで、世界各地の文化圏において「弁論術」というものがひとつの分野として確立していたのはそのためです。もちろん現代でも新しいスタイルの弁論術は必要とされ、「プレゼンテーション・スキル」として現代のビジネスマンには必須の技能となっています。

彼は弁論、議論に長けていて、街から街へ、村から村へと遊説を行って一生を過ごしました。弁論とは言葉を操ることです。人は言葉によりものを考え、分析し、分割します。人が人たる所以は、言葉を持つということです。

彼は非常に分析力に優れ、ものごとを深く追及し分析したのです。そしてその思索の結果を熟練された弁論技法により人々に伝えました。彼はある意味で思索家であり、哲学者でもあったのです。ただ、彼は弁論家の常としてたいそうな議論好きでもありました。各所でいろいろな人をつかまえて議論を行っていました。世の中の人すべてが議論好きというわけではありません。したがって彼は人々に疎ましく思われることも少なくありませんでした。

【天相星】

●封神演義のキャラクター

天相星は、商（殷）王朝における太子聞仲に当てられています。

聞仲は商王朝の３代につかえた元老でした。太子とは「軍師」のことです。

彼はその昔、崑崙山で仙術を修めたことがありました。しかし、仙骨がないということで（仙人になるためには、仙骨というものが必要なのだそうです）下山させられ、その後闡教とは別の截教で修業をし直しました。従って、彼は兵法に優れ武術に長けているばかりでなく、道術、玄術にも通じています。

聞仲は紂王の武術の師匠でもありました。それもあって、紂王は決して聞仲には逆らうことができません。聞仲が怒りだすと、さすがの紂王もお尻をぶたれた子供のようになってしまいます。

聞仲は、乱心して暴虐の限りをを続ける紂王、乱れる商王朝、腹心の黄飛虎の離反などに心を痛めながら、最後の最後までなんとか商王朝を持ちこたえさそうと、精一杯の努力を続けます。

西岐（後の周）軍との戦いでは、姜子牙の好敵手として丁々発止の戦いを繰り広げます。しかし天数には逆らえず、ついに絶竜嶺という所で、西岐軍についた仙人の手によって一命を落とすのでした。

●私のイメージ

封神演義の聞太子は、かなり剛の者のイメージですが、私の天相星についてのイメージは、もっと穏やかなものです。以下、テキストより転載します。

天相星は、文人の星です。慈悲、博愛、寛容を表します。

人に例えると、天同星と同じく中国古代の高級官僚や閣僚に例えることができます。天相星は文官の星ですから、内務大臣といった役どころでしょうか。

彼は正義感に溢れる人で、不正や悪を黙って見過ごすようなことはありませんでした。しかし、悪を見ても詰め寄って厳しく糾弾するようなことはなく、悪事を行った者が自らの非を悟り悔い改めるのであれば、寛容の心でこれを許したのです。

彼は非常に慈悲深く面倒見のよい人でもありました。自己犠牲とも思えるほど他人を気づかい、世話をやいたのです。

彼は閣僚としての腕をふるい、国内の諸問題を次々とかたづけていきます。

彼は一方で、酒食を愛する洒脱な一面を持ち合わせていましたから、彼の周囲には自然と人が集まってきました。

【天梁星】

●封神演義のキャラクター

天梁星は、紂王討伐の東征軍中軍の救応使（将軍）として活躍した李靖に当てられています。

李靖は、もともとは陳塘関という関所の総兵（司令官）でした。彼は崑崙山で修業したこともあり、また彼の息子金吒、木吒はそれぞれ崑崙山で修業しています。李靖は、封神演義のストーリー上では、将軍としての活躍もさることながら、哪吒という魂魄のない一種の人造人間の父親という役割の方が重要です。

李靖は、早い時期に陳塘関総兵を辞し、商王朝との縁を切ります。また、崑崙山と縁が深いことから必然的に西岐軍に加わり、息子たちを率いて、最後まで活躍します。

●私のイメージ

私の天梁星についてのイメージも、ほぼ封神演義のイメージと同一です。以下、テキストの記述を転載します。

天梁星は、決断、指導、面倒見を表わします。天梁星は大将軍星であり、武官の星です。

これを人に例えると、連合軍総司令官である武曲星の配下で全軍をたばねた大将軍に例えられます。彼は総指令の命を受け前線において全軍を指揮します。彼が活躍したのは、古代中国の戦国時代です。戦乱につぐ戦乱。彼はその激動の時代、幾多の困難な戦いを乗り越え、自軍を勝利に導きます。

彼は戦いに臨み、敵・味方の兵力や周囲の地理の状況を瞬時に把握し、冷静沈着に的確な判断を行い、適切な戦術と戦法を行使しました。威厳と決断力の男でした。

また彼は、親身になって配下の者たちの面倒を見ました。したがって、彼の部下は大将軍に対して全幅の信頼を寄せていました。彼の配下の軍隊は大平原を駆け回り、勇猛果敢に敵に挑み、最後には大きな勝利を手にするのです。

【七殺星】

●封神演義のキャラクター

七殺星は、商（殷）王朝きっての大将軍、鎮国武成王　黄飛虎将軍に当てられています。

黄飛虎は太子聞仲、元老商容、亜相比干と並ぶ商王朝の重臣で、正義感あふれる硬骨漢でした。黄家は代々商王朝に使え、黄飛虎将軍は鎮国武成王の称号を授けられ、百万の大軍を率いて諸侯を睥睨（へいげい）していました。

彼も聞仲、比干同様、妲己にいいように操られ乱心していく紂王と、疲弊していく王朝に心を痛め、なんとか王朝を元の状態に戻そうと努力します。姜子牙のアドバイスを受け、妲己の浪党を一網打尽にし、その毛皮で上着をつくったりもしました。が、それがかえって逆に妲己の怒りを買い、妲己のワナにはまって夫人と、紂王の貴姫として中宮に入っていた妹を殺されてしまいます。

かたちとしては、賈夫人は紂王の誘惑から操を守るため、自ら摘星楼という物見台から飛び降り自害し、また黄貴姫は紂王に摘星楼から突き落とされたようなかたちになります。

さすがの黄飛虎も、最愛の妻と妹を殺されてはもう我慢ができません。とうとう商王朝を見限って、一族もろとも西岐に亡命します。

西岐に亡命してからは武王に厚く迎えられ、ここでも開国武成王の称号を受領し、商王朝討伐の軍に加わり大活躍します。

●私のイメージ

封神演義の黄飛虎将軍は、終始正義の人というイメージですが、七殺星はもう少し剛毅なイメージでとらえてもいいような気がいたします。以下、テキストの記述を転載します。

七殺星は、剛毅、武勇、激烈を表します。人に例えると、軍国主義国家の宰相に例えられるでしょう。彼の国は、古代中国の戦国時代において、どの国ともくみせず独自路線を貫いていました。この国は国民皆兵制度を採択し、協力な軍隊を誇っていました。この国は農政よりも、文化教育よりも、軍隊を増強し、強大な軍事力により他国と対抗する道を選んだのです。

彼はその中にあって、国政の最高実力者の地位にいましたが、また同時に全軍の総司令官であり、大元帥でもありました。彼の元に国政の一切の権力が集中していたのです。彼はこの国の規則であり、法律であり、すべての指示命令を司っていました。

彼の頭の中は、いかに戦って敵を倒すかということで一杯でした。敵は国外の敵対国だけではなく、国内にも数多く存在していました。実は彼の身近にも多くの敵がいたのです。

不安にかられて粛正に乗り出すこともたびたびでしたが、決して彼の心が休まることはありませんでした。彼は、独裁者の常として孤独な人間でした。

【破軍星】

●封神演義のキャラクター

破軍星は、商（殷）王朝最後の王、紂王に当てられています。

紂王は幼名を季子と言い、商王朝第 30 代の王、帝乙の第３子として生まれました。封神演義によると、大地震という天変地異の真只中に産声を上げたことになっています。

彼は、帝王学は宰相の商容に、武術は太子聞仲にしこまれ、逞しく利発な若者に育っていきます。季子はその利発さから２人の兄を差し置いて王位を敬称し、紂王となります。

紂王も、はじめは多少人よりはスケベであったくらいで、善政をしき、また王朝も有能な忠臣に支えられ、人々は泰平の世を謳歌していました。

ところがある日、紂王が女媧宮へ詣でたことから、その流れがおかしくなってきます。この世のものとは思えぬ女媧像（神像）の美しさと艶めかしさに心を奪われた紂王は、悪戯心か茶目っ気か、周囲の者が止めるのも聞かず、女神様への無礼千万な思いをしたためたラブレターを、女媧宮の壁に落書きしてしまいました。これは悪戯が過ぎました。女神である女媧は怒り心頭に達し、その配下の千年の牝狐の妖精に紂王を懲らしめることを命じます。

牝狐の妖精は、諸国随一の美人と誉れが高い妲己という美少女を殺し、そっくりに化け宮廷に入り込み、紂王に近づきます。もとより人並み以上にスケベな紂王は、その色香に惑わされ、いともあっさりと妲己を身近に置いてしまいます。

後は妲己の妖術と色香で、紂王は妲己のなすがままに操られ、暴虐と乱暴の限りを尽くします。

忠臣たちも、あるものは殺され、またあるものは離反し、そのために、王朝はどんどん荒廃し、疲弊していきます。周辺諸候も紂王に散々な目に遭わされ、次々に王朝から離れていき、ついに諸国が連合して王朝に反旗をひるがえすまでになります。その商王朝征伐軍の中心となったのが、姫昌（後にはその子姫発）率いる西岐軍でした。

結局は商王朝は西岐軍に滅ぼされ、西岐は新たに周という王朝を打ち立て、姫発は武王を名乗ることになります。

●私のイメージ

封神演義の紂王は、ある意味で運の悪い、かわいそうな男であります。破軍星のイメージは、紂王のイメージでも了解できないことはないのですが、私はむしろ壊滅的な殲滅戦を挑む武将というイメージで捉えてみました。以下、テキストから転載します。

破軍星は、決断、破損、変動を表します。前の七殺星と同じく激烈な武将の星で、七殺星と同様のものを象徴します。

破軍星を人に例えると、七殺星の軍事政権きっての精鋭部隊である「突撃隊」を率いる将軍に例えることができるでしょう。

「突撃隊」は、この軍事国家の中でも勇猛果敢で恐れ知らずの強者ばかりを集めた精鋭部隊でした。平時は国家元首である七殺星の親衛隊として側に控え、元首から全面的な信頼を寄せられていました。ひとたび戦いがはじまると、最も困難で危険な戦いに臨み、いかに難攻不落の敵防衛線も、死を恐れぬ捨て身の攻撃により陥落させました。

破軍星は厳しい鉄の規律をもって、この精鋭部隊を率いていました。部隊の兵士たちは、彼の命令には絶対服従を命じられ、疑問や質問は許されませんでした。

しかし、強大な隣国との最後の戦いにおいて、彼は決して退却しない殲滅戦を挑み、彼の部隊とともに華々しく戦場に散ったのです。

【火星・鈴星】

●封神演義のキャラクター

火星・鈴星は、それぞれ紂王の息子である殷郊と殷洪に当てられています。

紂王には姜皇后との間にもうけた殷郊と殷洪という２人の子供がいました。殷郊は長子ですので、すなわち皇太子ということになります。天府星の稿でも述べましたが、姜皇后は妲己の計略にはまり、むごい拷問の末に殺されてしまいます。変わりはてた

母の姿に幼い王子たちは涙し、母の仇の妲己を殺そうとしますが、逆に乱心した紂王により命を狙われることになります。

商王朝の忠臣比干と黄飛虎は幼い王子に同情し、なんとかかばって逃がそうとします。しかし、ついには紂王の差し向けた追手に追い付かれ、あわや捕えられそうになります。と、その時、一陣の突風がまき起こり、殷郊と殷洪は突風にさらわれ行方不明となります。実は崑崙山の秘密兵器である黄巾力士（今でいうロボット。鉄人 28 号みたいなものです。）に救助されたのです。

その後２人はそれぞれ崑崙山の仙人のもとで修業に励みます。いよいよ西岐が商王朝討伐の遠征を行おうとする時に、西岐軍に加勢し、母の仇を打つべく下山しますが、運命の悪戯によって、２人ともその命を落としてしまいます。

●私のイメージ

たしかに殷郊と殷洪は、はじめは幼い王子だったのですが、崑崙山での修業で逞しくなり、結局は崑崙山に歯向かうかたちになって命を落としますので、火星・鈴星に仮託することもわからないではないのですが、私は、火星・鈴星はもう少し粗野で荒っぽいイメージを感じるのです。そこで、武闘家・格闘家のイメージでまとめてみました。以下、テキストから転載します。

火星・鈴星は、剛強、激烈、怪我を表します。

この星を人に例えると、武闘家、武術家に例えることができます。

彼は大変勇猛にして果敢な戦士で、剣術、槍術、その他徒手空拳による格闘術など武芸百搬を極めていました。どのように激しい戦（いくさ）でも、決して臆することなく最前線で勇ましく戦いました。

【文昌星･文曲星】

●封神演義のキャラクター

文昌星・文曲星は、西岐軍に加勢した絶世の美女、嬋玉と竜吉に当てられています。

嬋玉は、もともとは三山関の総兵であった（ということは商王朝側であった）トウ（登＋おおざと、で一字）九公の娘で、仙洞で修業をしていたことがあります。ところが、彼女の美貌が並外れて優れていたので、他の仙人の修業の妨げになると、早々に下山させられてしまいました。

彼女は本格的な仙術は身に付けていませんが、弾石の術を授けられました。美貌と武勇の女戦士なのです。嬋玉はそのような崑崙山との縁から、最終的には父のトウ九公と共に西岐軍につき、活躍します。

竜吉は竜吉公主と言い、瑶池金母を母に持ち鳳凰山に住む天女で、天界一の美天女でした。どれくらいの美人かと言うと、その美貌と妖しさゆえに天界を追放になるくらいの美人でした。

竜吉は崑崙山の仙人の楊戩と一夜契った縁により西岐軍に加わり、活躍します。

いずれ２人は、方や人間界一、方や天界一の美人の女戦士なのです。

●私のイメージ

文昌星・文曲星には、確かに美男美女という意味もありますから、絶世の美女とされている嬋玉と竜吉に当てはめるのもわからなくはないですが、嬋玉も竜吉も美人である他に、非常に勇ましい女戦士で（いってみれば、ビューティー・アマゾネス・ファイターと言ったところでしょうか）、文昌星・文曲星にしてはちょっと強すぎるイメージを感じます。私は、文昌星・文曲星の文書、試験といった意味を重視して、文官のイメージでまとめてみました。

私のテキストから転載しますと、以下のとおりです。

文昌星・文曲星は試験の星です。学問を司り、知識、文章、芸術を表します。

この星を人に例えると、中国古代の文官に例えられるでしょう。彼らは中央官庁の閣僚の側近にあって、全ての文書と記録を司っていました。皇帝の詔勅をはじめ、法令、裁判記録、財政管理簿、古今の諸記録など、あらゆる文書の管理責任者でした。

彼らは非常に博識で文章作法に通じ、時には詔勅や法令の草案を起草することもありました。また官吏登用試験も彼らが管理していました。

【擎羊星･陀羅星】

●封神演義のキャラクター

擎羊星は、封神演義の後編の重要キャラクターである崑崙山の道士楊戩に、陀羅星は黄飛虎将軍の息子の黄天化に当てられています。

楊戩は崑崙山金霞洞の玉鼎真人門下の道士ですが、清源妙道真君の仙号を持ち、その気になれば一山一洞の主となる資格を持った仙人です。姜子牙が西岐の軍師となり、本格的に商王朝と対峙した頃に登場し、姜子牙を陰に陽に助け、大活躍します。

黄天化は、黄飛虎の子供でしたが、３つの時に木登りをしていて、足を踏み外して川に落ちてしまいました。そこを崑崙山の道徳真君という仙人に助けられ、彼のもとで仙術の修業を積みます。

黄飛虎将軍が商を見限って西岐に亡命したあと、ある戦いにおいて窮地に陥ります。そこへ黄天化が颯爽と現われ、父である黄飛虎の危機を救います。黄飛虎は、死んだと思っていた息子が生きており、また逞しく成長したことを喜びます。その後黄天化は父黄飛虎を助け、西岐軍で活躍します。

●私のイメージ

楊戩も黄天化も、激しい戦いで大活躍する仙人ですから、戦闘力は大いにありますが、性格的には擎羊星･陀羅星に喩えるのはちょっとスマートすぎるかなあという気がいたします。私は擎羊星・陀羅星は、もう少し粗野で乱暴なイメージを感じますので、やくざの親分といったイメージでまとめてみました。

擎羊星・陀羅星は、剛毅、粗暴、怪我を表します。

この星を人に例えると、ヤクザの親分に例えることができるでしょう。「ヤクザ」と言っても現代の日本の暴力団のように、ただの無法者が集まった暴力集団というものではなく、任侠を重んじた漢（おとこ）の集団でした。「侠」とは「おとこだて」のことで、激しく勇ましいこと言います。古代中国のある時期、支配者階級がつくりだす社会の矛盾に疑問を感じそれを受け入れられないはみ出し者たちが集まって徒党を組み、ヤクザの集団を形成していました。彼らは、決して農民や商人などの一般庶民から略奪することはありませんでしたが暴力と（当時の支配者たちから見れば）非合法な手段により、豪族や地方官吏に対して反抗したのです。しかし、このヤクザの集団も、激しい抵抗の末、ついには諸侯の軍隊に滅ぼされてしまいました。